# 大学の世界展開力強化事業（平成28年度採択） 東京外国語大学　取組概要

【事業の名称】（選定年度28年度・（タイプB　ASEAN））

## 日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム

### 【事業の概要】

本プログラムは、ミャンマー・ラオス・カンボジアのトップ大学であるヤンゴン大学、ラオス国立大学、王立プノンペン大学と本学が実施する取組である。これら３大学は、今後、同地域における日本研究・日本語教育の中核としての成長が大いに期待されている。
本取組は、次の３つの柱からなる。

1. 短期 Joint Education Program：本学のビルマ語専攻・ラオス語専攻・カンボジア語専攻の教育組織と、現地３大学の文系諸学科が協働し、互いの地域に関心をもつ学生を派遣しあい、共同教育を実施する。実施形態は、「短期派遣・短期受入れ」による。
2. 交換による長期留学：本学はビルマ語・ラオス語・カンボジア語を学ぶ学生を１年間派遣し、現地の学生とともに言語・文化・社会に関する科目を受講させる。また、留学前に日本語教育についての基礎知識を身に付けさせ、日本語教育のサポートに当たらせる。ミャンマー・ラオス・カンボジアからは、日本に関心をもつ多様な学生を本学に受入れ、日本語及び日本についての教育を実施する。受入れ学生に対しインターンシップ等の機会を与え、将来の日本と東南アジアの関係を担う人材の日本理解を深化させる。
3. 大学院レベルの交換：本学からはミャンマー研究・ラオス研究・カンボジア研究の修士学生を派遣し、諸分野の研究調査に当たらせ、当該地域の専門家を育成する。ミャンマー・ラオス・カンボジアからは、大学院総合国際学研究科などに受入れる。正規生については日本研究や日本語教育学分野での修士学位の取得を促進する。

### 【交流プログラムの概要】

| ミャンマー　ヤンゴン大学 | ラオス　ラオス国立大学 | カンボジア　王立プノンペン大学 |
|---|---|---|
| 国内最高峰の国際化拠点校 | 国内最高峰の「日本語学科」 | 国内唯一の「日本語学科」 |
| 日本からミャンマー・ラオス・カンボジアへ | ３段階の交流プログラム | ミャンマー・ラオス・カンボジアから日本へ |
| 短期 Joint Education Program | 学部前半 | 短期 Joint Education Program |
| １年間の交換留学 | 学部後半 | １年間の交換留学 |
| ミャンマー・ラオス・カンボジア研究の院生派遣 | 大　学　院 | 日本研究の院生受け入れ（総合国際学研究科） |

本事業の目的　ミャンマー、ラオス、カンボジアに関する本学の人材養成機能を強化するとともに、ミャンマー、ラオス、カンボジアの日本拠点を支援し、知日人材の養成を実現する

### 【本事業で養成する人材像】

・日本側の学生： ミャンマー・ラオス・カンボジアの言語・文化・社会を深く理解し、同地の発展、および日本との経済関係の深化、文化的・社会的交流の活性化に寄与する人材を育成する。
・ミャンマー・ラオス・カンボジア側の学生： 日本と日本語を理解する知日人材を広く育成し、その中からとくに優れた人材を見出し、現地で日本教育・日本語教育に当たる教育人材として養成する。

### 【本事業の特徴】

| | | |
|---|---|---|
| 特徴①<br>学部から大学院までの<br>一貫したプログラム | 特徴②<br>本学の理念・ビジョンに<br>合致したプログラム | 特徴③<br>同数に近い交換を実現する<br>プログラム |
| 特徴④<br>本学学生が日本教育・<br>日本語教育をサポート | 特徴⑤<br>受入学生のボランティア、<br>インターンシップ機会 | 特徴⑥<br>ASENA+3のガイドラインの<br>定着を支援 |

### 【交流予定人数】

| ＜タイプB＞ | H28 | H29 | H30 | H31 | H32 |
|---|---|---|---|---|---|
| 学生の派遣 | 32 | 32 | 32 | 32 | 33 |
| 学生の受入 | 18 | 22 | 22 | 22 | 23 |

# 1. 取組内容の進捗状況（平成28年度）

【東京外国語大学】

【事業の名称】（選定年度28年度・（タイプB ASEAN））
日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム

## ■ 交流プログラムの実施状況

・短期Joint Education Program、交換による長期留学及び大学院レベルの交換の3つのプログラムにおいて学生の派遣及び受入を計画どおり実施した。
・派遣学生は、各国言語を学んだほか、ミャンマー・ラオス・カンボジアへの理解を深め、日本語学科における補助などの活動を行った。受入学生は、本学でそれぞれの言語を学ぶ学生とのタンデム学習のほか、日本語及び日本文化関連科目の授業を履修することで日本語・日本文化についての知識を深めた。

ラオス国立大学、王立プノンペン大学からの受入
（短期Joint Education Program 閉講式）

### 交流プログラムにおける学生のモビリティ

#### ○ 日本人学生の派遣

・短期Joint Education Programの派遣では、2週間から3週間、各国言語を学んだほか、社会、文化を体験するプログラムに参加し、ミャンマー・ラオス・カンボジアへの理解を深めた。交換による長期留学の派遣では、各言語での授業を履修するほか、日本語学科における補助や、日本語サポーターとしての活動を通し、現地での所属学科や日本語を学ぶ学生たちとの交流を深めた。また、大学院レベルの交換では、本学から研究留学生1名、日本語教育支援者１名を王立プノンペン大学に派遣し、大学院生の研究が進展した。

ヤンゴン大学からの受入
（短期Joint Education Program 日本文化体験研修（鎌倉））

#### ○ 外国人留学生の受入

・短期Joint Education Programの受入では、約10日間学生を受け入れ、本学で各国の言語を学ぶ学生とのタンデム学習のほか、日本文化体験学習などの機会を提供し、知日人材の養成の基礎作りを行った。交換による長期留学の受入では、日本語及び日本文化関連科目の授業を履修することで日本語・日本文化についての知識を深めた。また、大学院レベルの交換では、国際日本専攻日本語教育リカレントコースに王立プノンペン大学から学生を受け入れ、高度な能力を持った日本語教育人材の育成に寄与した。

| ＜タイプB＞ | H28 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ | ﾐｬﾝﾏｰ | ﾗｵｽ | ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ | 実績 | 計画 |
| 学生の派遣 | 短　期 | 10 | 9 | 3 | 30 | 32 |
| | 長　期 | 2 | 2 | 2 | | |
| | 大学院 | 0 | 0 | 2 | | |
| 学生の受入 | 短　期 | 3 | 4 | 6 | 20 | 18 |
| | 長　期 | 2 | 2 | 2 | | |
| | 大学院 | 0 | 0 | 1 | | |

## ■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

・11月に連携大学から関係教員を招へいするとともに、２月に本学関係教員がミャンマー・ラオス・カンボジアに出張し、学生交流に関するASEAN＋３の枠組みについて情報を共有した。
・短期Joint Education Programにおける派遣では、参加学生の言語能力と文化理解の向上を図り、学習成果の検証を踏まえ、参加学生に2単位を認定した。なお、派遣学生には留学前・留学後にCEFR-Jに準ずる語学力判定を行い、語学能力の変化を確認した。
・外部有識者を加えたASEANプログラム実行委員会及び外部評価委員会を開催し、今後のプログラム推進に資する有益な意見を聴取することができた。

## ■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

・1月に、東京検疫所東京空港検疫所支所から検疫医療の専門家を迎え、「海外渡航における検疫・感染症についての説明会」を開催し、マラリアや狂犬病等の特徴と対策、海外での飲食時の注意や渡航前にすべき準備等についての説明を受け、派遣予定者などがこれらの認識を深めた。
・ミャンマー・ラオス・カンボジアのTUFSグローバルコミュニティのメンバーを更新し、今後の交流の発展に資することができた。

## ■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

・Webサイト「TENKAI-CALM」を立ち上げ、本事業の取組を日本語、ビルマ語、ラオス語、カンボジア語で発信した。
・本事業のパンフレットを、日本語・英語、ビルマ語、ラオス語、カンボジア語で作成し広報した。

## ■ グッドプラクティス等

・本事業の初年度において、短期Joint Education Program、交換による長期留学及び大学院レベルの交換の３段階のプログラムが計画どおり実施され、学生の派遣・受入において成果があった。
・短期Joint Education Program では、受入学生のプログラム実施後のアンケートや派遣学生のレポートにおいて、「短時間でも多くのことを経験した。私たちは日本人学生との触れ合いの中で積極的に日本について学ぶことができた。」などのコメントがあり成果を把握することができた。

# 2. 取組内容の進捗状況（平成29年度）

【東京外国語大学】

【事業の名称】（選定年度28年度・（タイプB　ASEAN））
日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム

## ■　交流プログラムの実施状況

・短期Joint Education Program、交換による長期留学及び大学院レベルの交換の3つのプログラムにおいて学生の派遣及び受入を計画どおり実施した。
・派遣学生は、各国言語を学んだほか、ミャンマー・ラオス・カンボジアへの理解を深め、日本語学科における補助などの活動を行った。
・受入学生は、本学でそれぞれの言語を学ぶ学生とのタンデム学習のほか、日本語及び日本文化関連科目の授業を履修することで日本語・日本文化についての知識を深めた。

ヤンゴン大学からの受入
（短期Joint Education Program 開講式）

## ■交流プログラムにおける学生のモビリティ

### ○　日本人学生の派遣

・短期Joint Education Programの派遣では、2週間から3週間、各国言語を学んだり、各言語での授業を履修したほか、各国それぞれにおいて特色ある社会、文化を体験するプログラムに参加し、それぞれの文化についての理解と、言語力を向上させた。
・交換による長期留学の派遣では、各言語での授業を履修するほか、日本語教育に関する協力活動を行い、現地で日本語を学ぶ学生の日本語能力向上に貢献することができた。
・大学院レベルの交換では、本学大学院生のリサーチ目的の留学を支援する、Joint Education Programにより、ヤンゴン大学に2名、王立プノンペン大学に１名の学生を派遣した。また、ヤンゴン大学には、本学Global Japan Officeが提供する日本語教室の補助教員として、大学院生1名が派遣され、これにより、大学院レベルの交換システムの構築につながった。

| <タイプB> | H29 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ | ミャンマー | ラオス | カンボジア | 実績 | 計画 |
| 学生の派遣 | 短　期 | 9 | 9 | 4 | 34 | 32 |
| | 長　期 | 3 | 3 | 2 | | |
| | 大学院 | 3 | 0 | 1 | | |
| 学生の受入 | 短　期 | 5 | 5 | 6 | 24 | 22 |
| | 長　期 | 3 | 3 | 2 | | |
| | 大学院 | 0 | 0 | 0 | | |

### ○　外国人留学生の受入

・短期Joint Education Programの受入では、9日～23日間学生を受入れ、本学でそれぞれの言語を学ぶ学生とのタンデム学習、日本語の集中講義や日本文化体験学習などの機会を提供し、知日人材の養成の基礎作りを行った。
・交換による長期留学の受入では、日本語及び日本文化関連科目の授業を履修することで日本語・日本文化についての知識を深めた。
・ヤンゴン大学学生がトヨタ工機でのインターシップを、ラオス国立大学学生が近隣の小学校においてボランティア活動を、王立プノンペン大学の学生が武蔵野市国際交流協会を通じたホストファミリーとの交流を行った。
・長期受入学生の8名中2名が博士課程での日本留学を希望し、学修意欲の向上が確認された。

王立プノンペン大学からの受入
（小学校での文化交流）

## ■　質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

・ASEAN+3の枠組みの浸透や連携大学による協力体制の構築など連携大学への確認事項を取り纏め、12月から3月の短期Joint Education Program（派遣）に合わせて、ヤンゴン大学、王立プノンペン大学及びラオス国立大学を本学教職員が訪問し、関係教員とこれら確認事項について協議した。
・受入学生が本学で認定した単位について、帰国後に単位認定されたかを調査し、ラオス国立大学及び王立プノンペン大学では単位認定されたことを確認した。
・派遣学生の留学前・留学後に実施した言語力についてのCEFR-Jによる自己診断では、特に聴解、会話力の伸びが認められた。

## ■　外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

・本年度から、新たに受入学生全員がホームビジットを行い、日本人や日本文化の理解に役立ったとのフィードバックがあった。
・2月にカンボジアにおける、TUFSアソシエイツとの会合や、3月にラオスにおいて、TUFSグローバルコミュニティ会合を開催し、本学教職員や現地で活躍する卒業生、もと留学生と情報交換し、派遣学生たちが今後の学究生活の刺激を享受した。

## ■　事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

・本事業のWebページにおいて、交流プログラムの実施状況を随時発信（年度中34回）したほか、ラオスやカンボジアの教育制度について各国教員が調査した内容を掲載し情報提供した。

## ■　グッドプラクティス等

・派遣学生が、現地のスピーチコンテストに出場し、奨励賞を受賞した（ラオス）。また、日本人材開発センターで日本語を学ぶ現地の方々のサポート（カンボジア）をするといった経験などから、語学力や異文化理解の向上に加え、現地で働く意欲の高まりや、知識の深長を成果として上げる学生が多く見られた。
・短期Joint Education Program の受入学生のプログラム実施後アンケートにおいて、8割の学生が日本語を聞く力、日本語でのコミュニケーション能力について伸びたと感じていること、また、16名の参加者全員が今後さらに長期の日本留学プログラムに参加したいと回答し、学修意欲の向上が確認できた。

# 3. 取組内容の進捗状況（平成30年度）

【東京外国語大学】

【事業の名称】（選定年度28年度・（タイプB　ASEAN））
日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム

## ■　交流プログラムの実施状況

・短期Joint Education Program、交換による長期留学及び大学院レベルの交換の3つのプログラムにおいて学生の派遣及び受入を計画どおり実施し、計画数以上の実績をあげた。
・派遣学生は、各国言語を学んだほか、ミャンマー・ラオス・カンボジアへの理解を深め、日本語学科における補助などの活動を行った。
・受入学生は、本学でそれぞれの言語を学ぶ学生とのタンデム学習のほか、日本語及び日本文化関連科目の授業を履修することで日本語・日本文化についての知識を深めた。

ラオス国立大学からの受入
（短期Joint Education Program 開講式）

## ■交流プログラムにおける学生のモビリティ

### ○　日本人学生の派遣

・短期Joint Education Programの派遣では、2週間から3週間、各国言語を学んだり、各言語での授業を履修したほか、各国それぞれにおいて特色ある社会、文化を体験するプログラムに参加し、それぞれの文化についての理解と、言語力を向上させた。
・交換による長期留学の派遣では、各言語での授業を履修するほか、日本語教育に関する協力活動を行い、現地で日本語を学ぶ学生の日本語能力向上に貢献することができた。
・大学院レベルの交換では、本学大学院生のリサーチ目的の留学を支援する、Joint Education Programにより、ヤンゴン大学に2名、ラオス国立大学に2名の学生を派遣した。また、ヤンゴン大学には、本学Global Japan Officeが提供する日本語教室の補助教員として、大学院生1名を派遣し、これにより、大学院レベルの交換システムの構築につながった。

| <タイプB> | H30 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ | ミャンマー | ラオス | カンボジア | 実績 | 計画 |
| 学生の派遣 | 短　期 | 10 | 11 | 2 | 36 | 32 |
| | 長　期 | 3 | 2 | 3 | | |
| | 大学院 | 3 | 2 | 0 | | |
| 学生の受入 | 短　期 | 5 | 5 | 6 | 28 | 22 |
| | 長　期 | 3 | 4 | 3 | | |
| | 大学院 | 0 | 1 | 1 | | |

### ○　外国人留学生の受入

・短期Joint Education Programの受入では、9日～23日間学生を受入れ、本学でそれぞれの言語を学ぶ学生とのタンデム学習、日本語の集中講義や日本文化体験学習などの機会を提供し、知日人材の養成の基礎作りを行った。
・交換による長期留学の受入では、日本語及び日本文化関連科目の授業を履修することで日本語・日本文化についての知識を深めた。また、近隣の小学校におけるボランティア活動や武蔵野市国際交流協会を通じたホストファミリーとの交流等を行った。さらに、山形スタディツアーやソニーおよび日立建機における一日インターンシップに参加し、地方活性化や各企業について理解を深めた。
・大学院レベルの受入では、担当教員の指導により、日本語教育分野の研究を推進させた。また、日本とASEAN諸国間の人物交流事業に参加し、日本理解をより深化させた。

連携3大学からの交換による長期受入
（ソニー1日インターンシップ）

## ■　質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

・ASEAN＋3の枠組みの浸透や連携大学による協力体制の構築など連携大学への確認事項について、8月から3月の短期Joint Education Program（派遣）に合わせて、ヤンゴン大学、王立プノンペン大学及びラオス国立大学を本学教職員が訪問し、関係教員と協議した。
・長期受入学生が本学で認定した単位について、ラオス国立大学及び王立プノンペン大学で単位認定されたことを確認し、本学でも、長期派遣学生が先方大学で取得した単位について、その内容を精査し単位認定を行った。
・派遣学生の留学前・留学後に実施した言語力についてのCEFR-Jによる自己診断では、特に聴解、会話力の伸びが認められた。

## ■　外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

・長期受入の学生全員に各国語を学ぶチューターを配置し、日常生活や学習のサポート体制を構築した。また近隣小学校でのボランティア活動、日本舞踊や茶道等の日本文化体験、春季休暇中の日本語学習の継続、ゴミや災害に対する日本の取組に関する校外学習など、大学における講義だけでなく課外での様々な学習機会を提供し、日本をより深く理解できるプログラムを整備した。3国留学生合同プログラムとすることで、学生間の交流が広がる結果にも繋がった。
・派遣前に東京検疫所の専門職員を招いて「海外渡航における検疫・感染症についての説明会」を開催し、罹患する恐れのある病気の特徴やその対策などを説明し、派遣予定者の渡航準備に資する情報提供を行った。また、海外インターンシップ経験者による報告会や本学卒業生による講演会を開催し、留学中に取り組むべき課題や仕事における現地理解の重要性などの認識の共有を図った。

## ■　事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

・本事業のWebページにおいて、交流プログラムの実施状況を随時発信（年度中83回）し、広く情報を提供した。

## ■　グッドプラクティス等

・派遣学生が、在日カンボジア王国大使館で開催されたカンボジア語スピーチコンテストに出場し、1位と3位を受賞した。また、現地で日本語を学ぶ方々のサポートをするといった経験などから、語学力や異文化理解の向上に加え、現地で働く意欲の高まりや、知識の深長を成果として上げる学生が多く見られた。
・短期Joint Education Program の受入学生のプログラム実施後アンケートにおいて、8割の学生が日本語を聞く力、日本語でのコミュニケーション能力について伸びたと感じていること、また、参加者16名中15名が今後さらに長期の日本留学プログラムに参加したいと回答し、学修意欲の向上が確認できた。

# 4. 取組内容の進捗状況（令和元年度）

【東京外国語大学】

【事業の名称】（選定年度28年度・（タイプB　ASEAN））
日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム

## ■　交流プログラムの実施状況

・短期Joint Education Program、交換による長期留学及び大学院レベルの交換の3つのプログラムにおいて学生の派遣と受入を実施し、受入では計画数以上の実績をあげた。
・派遣学生は、各国言語を学んだほか、ミャンマー・ラオス・カンボジアへの理解を深め、日本語学科における教育補助などの活動を行った。
・受入学生は、本学でそれぞれの言語を学ぶ学生とのタンデム学習のほか、日本語及び日本文化関連科目の授業を履修することで日本語・日本文化についての知識を深めた。

連携3大学からの短期受入
（短期Joint Education Program 開講式）

### 交流プログラムにおける学生のモビリティ

#### ○　日本人学生の派遣

・短期Joint Education Programでは、2～3週間、各国言語を学んだり、各言語での授業を履修した。また、各国の特色ある社会、文化を体験するプログラムに参加し、それぞれの文化についての理解と、言語力を向上させた。なお、ラオスはコロナ禍のため、実施を見合わせた。
・交換による長期留学では、各言語での授業を履修したほか、日本語教育に関する協力活動を行い、現地で日本語を学ぶ学生の日本語能力向上に貢献することができた。
・大学院レベルの交換では、リサーチ目的の留学を支援するJoint Education Programにより、ラオス国立大学に1名、王立プノンペン大学に2名の学生を派遣した。また、ラオス国立大学に日本語教育支援として大学院生1名、ヤンゴン大学に本学Global Japan Officeが提供する日本語教室の補助教員として大学院生1名を派遣した。

| <タイプB> | R1 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ | ミャンマー | ラオス | カンボジア | 実績 | 計画 |
| 学生の派遣 | 短　期 | 9 | 0 | 6 | 25 | 32 |
| | 長　期 | 4 | 1 | 0 | | |
| | 大学院 | 1 | 2 | 2 | | |
| 学生の受入 | 短　期 | 5 | 5 | 6 | 26 | 22 |
| | 長　期 | 4 | 5 | 1 | | |
| | 大学院 | 0 | 0 | 0 | | |

#### ○　外国人留学生の受入

・短期Joint Education Programでは、８日間学生を受入れ、本学でそれぞれの言語を学ぶ学生とのタンデム学習、日本の先進的な取り組みを見学する学外研修、日本文化体験学習などの機会を提供し、知日人材養成の基礎作りを行った。
・交換による長期留学では、日本語及び日本文化関連科目の授業を提供することで日本に関する知識を深化させた。また、近隣の小学校や児童館におけるボランティア活動、武蔵野市国際交流協会を通じたホストファミリーとの交流などを行い、日本理解を深めるとともに、山形や福島へのスタディツアーや京セラにおける1日インターンシップに参加する機会を提供し、地方活性化や災害からの復興、日本企業についての理解を深化させた。
・大学院レベルの交換では、平成30年度の受入学生について、担当教員の指導により日本語教育学や言語学の研究を推進させた。また、修士論文執筆を支援し、修士号（言語学）を取得させた。

連携3大学からの交換による長期受入
（冬季プログラム 茶道体験）

## ■　質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

・ASEAN＋3の枠組みの浸透や連携大学による協力体制の構築など連携大学への確認事項について、短期Joint Education Programの派遣や受入の際に、本学の教職員による連携大学訪問及び3国の連携大学の学長や教職員の招へいを実施し、協議を行った。
・長期受入学生が本学で認定した単位について、ラオス国立大学及び王立プノンペン大学で単位認定されたことを確認し、本学でも、長期派遣学生が先方大学で取得した単位について、その内容を精査し単位認定を行った。
・派遣学生の留学前・留学後に実施した言語力についてのCEFR-Jによる自己診断では、特に聴解、会話力の伸びが認められた。

## ■　外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

・長期受入学生に各国語を学ぶチューターを配置し、日常生活や学習のサポート体制を構築した。また、春季休暇中の時間有効活用のため、3国合同の冬季プログラムとして日本語学習、着付けや茶道等の日本文化体験、ホームビジット、サントリー工場や給食センターにおける校外学習など、課外での様々な学習機会を提供し、日本をより深く理解できるプログラムを整備した。
・派遣前に東京検疫所の専門職員を招いて「海外渡航における検疫・感染症についての説明会」を開催し、罹患する恐れのある病気の特徴やその対策などを説明し、派遣予定者の渡航準備に資する情報提供を行った。また、インターンシップやNGO訪問などを経験した派遣学生による留学報告会や冬学期の集中講義として本学卒業生によるリレー講義を開催し、留学中に取り組むべき課題や仕事における現地理解の重要性などの認識の共有を図った。

## ■　事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

・本事業のWebページにおいて、交流プログラムの実施状況を随時（年度中75回）発信し、広く情報を提供した。

## ■　グッドプラクティス等

・短期Joint Education Program（受入）　では、一部のプログラムを3国合同で実施したことにより、国の枠を超えた交流が実現し、新たな繋がりを醸成することができた。
・長期受入学生へのキャリアパス支援として、VPI職業興味検査を実施し、本学キャリアアドバイザーによる解説を通じて自己理解を深め、今後の進路に関する意識喚起を促すことができた。
・コロナ禍による長期受入学生の学外での学習機会が減る中、オンラインによるバスツアー、日本就職入門セミナー、ラジオ番組制作のワークショップなどを実施し、多角的な視点から日本理解を深化させることができた。

# 5. 取組内容の進捗状況（令和2年度）

【東京外国語大学】

【事業の名称】（選定年度28年度・（タイプB ASEAN））
日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム

## ■ 交流プログラムの実施状況

・コロナ禍により、実渡航を伴う交流は派遣・受入ともに原則中止し、オンラインでの学生交流を「次世代型海外留学を目指すスタートアップ・プログラム」と位置づけ、タンデム学習、オンラインツアー、講演などを実施した。
・派遣学生は、上記プログラムを通じて各国言語を学んだほか、ミャンマー・ラオス・カンボジアへの理解を深め、現地の学生に日本の社会や文化を教えた。受入学生は、上記プログラムを通じて日本への理解を深め、本学の日本語及び日本文化関連科目の授業を履修することで日本語・日本文化についての知識を深めた。

〈ヤンゴン大学学生とのタンデム学習〉

### 交流プログラムにおける学生のモビリティ

＜タイプB＞

| | R2 | |
|---|---|---|
| | 計画 | 実績 |
| 学生の派遣 | 33 | 107 |
| 学生の受入 | 23 | 137 |

#### ○ 日本人学生の派遣

・短期プログラムでは、1週間連続の短期留学や集中講義で各国言語を学んだり、各国の社会や文化を体験した。また、単位取得を伴うオンラインでのタンデム学習や授業内講演を実施し、各国の文化や社会への理解を深めた。
・交換による長期留学では、王立プノンペン大学のカンボジア語での授業を履修し、言語運用能力を高め、現地理解を深めた。
・大学院レベルの交換では、ラオス国立大学の協力により、同大学の学生に対して行ったオンラインでの言語調査に基づいて修士論文を執筆し、言語学の学位を取得した。

#### ○ 外国人留学生の受入

・短期プログラムでは、オンラインにて各連携大学学生とのタンデム学習やラオス国立大学学生を対象とした授業内講演を実施し、日本語や日本文化・社会への理解を深め、知日人材養成の基礎作りを行った。
・交換による長期留学では、オンラインにて日本語及び日本文化関連科目の授業を提供することで日本に関する知識を深化させた。また、オンラインによる音声編集や映像翻訳のワークショップ、日本就職入門ウェビナー、体験プログラムを実施し、日本理解を深めるとともに、学生の希望職種に対する理解を深化させた。
・大学院レベルの交換では、4月よりラオス国立大学から1名、王立プノンペン大学から1名の大学院生を受入れ、担当教員の指導により日本語教育学や言語学の研究を推進させた。

〈ラオス国立大学学生への本学名誉教授による日本語の敬語表現に関する講演〉

## ■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

・ASEAN＋3の枠組みの浸透や連携大学による協力体制の構築など連携大学への確認事項について、オンラインプログラム実施の際に、本学と各連携大学の副学長や教職員と協議を行った。
・オンラインでのタンデム学習に参加した各連携大学の学生に対し、取組や発表内容を評価し、参加証明書を発行した。
・長期受入学生が本学で認定した単位について、ラオス国立大学及び王立プノンペン大学で単位認定されたことを確認し、本学でも、長期派遣学生が先方大学で取得した単位について、その内容を精査し単位認定を行った。
・派遣学生の留学前・留学後に実施した言語力についてのCEFR-Jによる自己診断では、4技能すべてについて向上が認められた。

## ■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

・長期受入学生に各国語を学ぶチューターを配置し、日常生活や学習のサポート体制を構築した。また、オンラインによる音声編集や映像翻訳のワークショップ、オンライン体験プログラムを実施するなど、課外での様々な学習機会を提供し、日本をより深く理解できるプログラムを整備した。
・派遣予定者については、「海外渡航における危機管理説明会」を開催し、留学中のリスク管理や性犯罪防止について説明し、渡航準備に資する情報提供を行った。また、冬学期の集中講義として本学卒業生によるリレー講義を開催し、留学中に取り組むべき課題や仕事における現地理解の重要性などの認識の共有を図った。

## ■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況、情報の公開、成果の普及

・本事業のWebページにおいて、交流プログラムの実施状況を随時（年度中53回）発信し、広く情報を提供した。
・プログラム参加者や教員よりビデオメッセージを集めて総括映像を作成し、本事業による成果を広く発信した。

## ■ グッドプラクティス等

・「次世代型海外留学を目指すスタートアップ・プログラム」の実施を通して、自走化を念頭にオンラインで双方の学生が参加する国際共同教育の枠組みを形成した。
・卒業生によるリレー講義をオンライン開催とし、講師を昨年度より増員して10名とすることで、昨年比3倍以上の履修学生を獲得し、講義内容や講師との質疑応答、レポート作成を通して、ASEAN地域とのビジネスにおけるやりがいや苦労、留学中や在学中に取り組むべき課題、コロナ禍における各企業や団体の取組の現状等について理解を深めることができた。
・コロナ禍による長期受入学生の学外での学習機会が減る中、オンラインツアーや映像翻訳のワークショップなどを実施し、多角的な視点から日本理解を深化させることができた。